

あかしびと 110号 (クリスマス号) 2024年12月発行
日本バプテスト同盟金沢文庫キリスト教会
☎236-0046 横浜市金沢区釜利谷西3-36-20 tel/fax 045-783-5475
(牧師) 並木裕忠
(名誉牧師) 森島牧人・森島恵
(教会) church.kanazawabunko@gmail.com
(ホームページ) kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp



「ルカによる福音書第2章1～21節(降誕記事)と解説」

並木 裕忠

11月の水曜集会「聖書を読み祈る会」で、2回に渡って読みましたご降誕の聖書箇所、ルカによる福音書 第2章1～7節と第2章8～21節について書きました文を掲載させていただきます。

ルカによる福音書 第2章1～7節

いよいよ、福音書の主役である主イエスの登場です。

1節 そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。

「そのころ」。この記事の直前には、ザカリアの預言(賛歌)があります。それは、洗礼者のヨハネの誕生から8日目に割礼を施す場面での出来事でした。それを受けて、ここで「そのころ」と言うのです。

「皇帝アウグストゥス」。古代ローマの初代皇帝です。紀元前63年9月23日生れで、紀元14年8月19日に亡くなっています。皇帝在位は紀元前30年より没年までです。母親のアティアはカエサルの姪(めい)にあたります。初めは、オクタウィアヌスと言いました。カエサルに引き立てられ、紀元前44年、カエサル暗殺後、遺言により養子とされ、オクタウィアヌスと称しました。紀元前43年にアントーニウス(紀元前82年～30年)、レピドゥス(?～紀元前13年)と共に第2次三頭政治を起こし、翌年アントーニウスと共に、ブルトゥス(?～紀元42年)らカエサル暗殺者たちと戦い、敗死させました。しかし、間もなくアントーニウスと対立し、レピドゥス失脚後、オクタウィアヌスは、イタリアおよび西方に勢力を拡げ、東方を勢力範囲としてエジプトのクレオパトラ(プトレマイオス7世)と結んだアントーニウスと争い、紀元前31年アクティウムの海戦で勝利、翌年アントーニウスは自殺しました。ローマの平和が回復し、オクタウィアヌ

スは、紀元前27年、元老院からアウグストゥス(尊厳者)の尊称を得て、ローマの支配者となりました。彼は専制君主体制を避け、外見上は共和制を維持しましたが、護民官職権や執政官命令権など重要な職権を独占しました。また、穀倉地エジプトを含む、全属州の約半分を直轄しました。さらに軍隊を統率し財政を管理するなど事実上彼の独裁体制が成立しました。紀元14年に死去し、死後、神格化されましたが、東部属州ではそれ以前から、彼への神的礼拝が行われていました。彼が皇帝であった時代、かなり長く平和の時期が続いたことから、そのことは「アウグストゥスの平和」と呼ばれました。そして、人々はこの平和はアウグストゥスのお陰であるとして、彼を「救い主」と呼んだこともあったそうです。また、ある地方では、彼の誕生日が「福音」と呼ばれたそうです。これは、「イエス・キリストの福音」と言う時の「福音(「よき知らせ」という意味)」と同じ言葉です。

第2章10～12節は、次回読む箇所ですが、こう言われています。「10 天使は言った。『恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである』」。福音書記者は、皇帝アウグストゥスが同じく「救い主」と呼ばれていたことを知って、ここで「救い主」と言っているのだろうと考えられています。すなわち、多くの人が皇帝アウグストゥスを「救い主」と呼ぶかもしれない。しかし、真の救い主は、この乳飲み子であると、福音書記者は主張しているのです。

また、真の平和をもたらす王は、「アウグストゥスの平和」とも言われた皇帝アウグストゥスではなく、誰にも知られず、ベツレヘムの馬小屋(家畜小屋)でお生まれになり、飼葉桶に寝かされた、もう一人の王である、主イエス・キリストであることを福音書記者は主張しているとも読めます。

「全領土の住民に登録をせよとの勅令が出た」。当時のローマ帝国の属州は、地中海を囲む沿岸地域全体を含んでいましたので、勅令が届いて、すべての登録が終わるまで、40年かかったとする学者もいるそうです。

2節 これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。

この住民登録、今日(こんにち)で言えば国勢調査でしょう。行われたのは紀元前7年であったとか、紀元前4年であったとか言われています。これによって、人々に人頭税や今日(こんにち)の土地の固定資産税にあたるものが課せられたようです。さらには、住民登録の際に、皇帝への忠誠も誓わされたのではないか、とも言われます。ユダヤの人たちにとって、他の神を礼拝する異教徒に税金を納め、異教徒の王に忠誠を誓わされることは、真に屈辱的なことだったでしょう。しかし、逆らうわけにはいかないのです。

3節 人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。

「自分の町」。自分の先祖が代々住んでいた町ということであったようです。現在の日本で言えば、本籍地でしょうか。

4 節 ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

「ダビデの家に属し、その血筋であったので、」。ヨセフがダビデ王家の末裔(まつえい)であったことは、ルカによる福音書 第3章23節以下の子孫から先祖へ遡(さかのぼ)る系図によって分かります。こうあります。「23 イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった。イエスはヨセフの子と思われていた。ヨセフはエリの子、それからさかのぼると、24 マタト、レビ、メルキ、ヤナイ、ヨセフ、(25～30節は省略)31 メレア、メンナ、マタタ、ナタン、ダビデ、・・・」。

「ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った」。「ベツレヘム」とは「パンの町」という意味です。しかし、ここで重要なのは、「ダビデの町」と呼ばれていたことです。ダビデはイスラエルの第2代の王です。このダビデ王とその子ソロモン王の時期に、イスラエルは最も領土を拡げ、最も繁栄しました。そのダビデの血筋の者たちがベツレヘムにいたのです。そして、バビロン捕囚後、戻って来たダビデ王家の血筋を引く者たちは、ベツレヘムを自分たちの町としました。やがて、ユダヤの人々は、強国の属州とされ続けている自分たちをその悲運から解放し、真の王国を再建してくれるメシア(救い主)は、ダビデ王家の血筋から、そして、ダビデの町と呼ばれるベツレヘムから出るという信仰が生まれたのです。

ルカによる福音書と共に、主イエスの降誕の時の様子を伝えるマタイによる福音書 第2章4～6節ではこう言われています。「4 王(ヘロデ大王)は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5 彼らは言った。『ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。6 「ユダの地、ベツレヘムよ、／お前はユダの指導者たちの中で／決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、／わたしの民イスラエルの牧者となるからである』」。この6節の言葉は、ミカ書第5章1節からの引用です。このように、ベツレヘムから偉大な指導者、すなわち、メシアが現れると預言され、人々はこの預言の成就を待ち望んでいたのです。

ヨセフの先祖も何代か前にはベツレヘムにいたのでしょうか。ヨセフ自身が、ベツレヘムに土地を持っていたのかもしれないと言う人もいます。

5 節 身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。

皇帝の勅令ということで、出産間近であったマリアも、ベツレヘムへ登録に行かなければならなかったようです。

6 節 ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、

7 節 初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

「布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」。ここで「飼い葉桶」が出てくることから、主イエスは馬小屋でお生まれになったと言われるようになります。馬小屋とは限らず、馬以外の家畜、ロバなどを飼っていた小屋で

あってもおかしくありません。また、当時の民家では、同じ屋根の下で、人も家畜も住んでいたとも言われています。宿屋は住民登録のためにヨセフたちより先に帰って来た人たちで一杯になってしまい、一般の民家に泊めさせてもらい、そこには、ベビーベッドとして使える物がなかったのので、丁度良い大きさの飼い葉桶を代用品に用いたとも言えるでしょう。不衛生なことは承知していたけれども、それしかなかったのでしょうか。

それにしても、ヨセフとマリアが泊めさせてもらったのが、馬小屋、家畜小屋、民家のいずれであっても、そして、もし宿屋に泊ったとしても、そこは、私どもの救い主がお生まれになるにはふさわしい場所ではなかったのです。しかし、これこそが、世の指導者たちや、富める者ではなく、むしろ貧しい者たち、弱い者たちに寄り添ってくださり、決して彼らを見捨てることのなかった主イエスのお姿だと思います。そして、神の御心に従って、最後まで遜(へい)くだって歩まれた主イエスの歩みは、ここから始まっているのです。

主イエスがお生まれになった時、世間はそれをまったく知らなかったのです。ユダヤの人々はメシア(救い主)の誕生を心待ちにしていたものの、この時、世間はメシアの誕生をお祝いしなかったのです。そこで、最初のクリスマス祝ったのは神だけだったと言われます。英国の詩人ミルトンは劇詩「失楽園」の中で、クリスマスの時、「天がどよめいた」と書きましたが、そこから、どよめいたのは天だけだったとも言われます。このように、主イエスのご降誕は、歴史上の出来事としては、まことに密(ひそ)やかな出来事だったのです。

ルカによる福音書 第2章8～21節

8節 その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。

「その地方」とは、この直前で、主イエス・キリストがユダヤのベツレヘムでお生まれになったことを述べていますので、ベツレヘムの辺りの地方ということですから。そして、このあと、羊飼いたちは徒歩でベツレヘムまで行って、そこで主イエスを見付け出し、礼拝を捧げ、たぶん、その晩の内に帰って来ています。ですから、ベツレヘムからそれほど離れていない所ということでしょう。

イスラエルの民は、定住し農業を始める前は、家畜を飼う遊牧民であったと考えられています。また、ダビデ王は少年の頃、羊の世話をしていました。そして、ダビデ王の作とされる詩編 第23編は、主なる神を羊飼い、そして、私ども人間を羊に譬えています。さらに、主イエスの譬え話にも羊飼いは登場します。そこから、羊飼いはイスラエルの民にとって身近な存在であったことが分かります。ところで、ここに登場する羊飼いは、羊を所有していた人たちであったか、雇われていた人たちであるかは不明です。ただ、羊を所有していたとしても、昼も夜も羊を野獣から守り、世話をしなければならず、ここで言われているように、野宿もしなければならなかったのです。そのように過酷な労働を強いられていました。そのために、安息日に休むことや、律法で決められた清めを行うことは十分に出来なかったと思われる。それによって、ユダヤ社会では低く見られていたとも

考えられます。その意味で、羊飼いは社会的に低い人たちの代表です。そのような羊飼いに天使が現れたこと、そして、主イエスが飼い葉桶の中に寝かされたことは、神は世の中で重きを置かれていない者たち、低く見られている者たちのことを、決して忘れておられないこと、むしろ、貧しく低い者たちを訪ねてくださる方だというメッセージがここにあると思います。私どもは、つい貧しい人たちや恵まれない人たちを、それだけで見下してしまいがちです。しかし、それは父なる神と御子主イエスのなさることに反することであることを、降誕物語からも学ぶこともできると思います。

私どもは、古代からのキリスト教会の習慣に従って、12月25日を主イエス・キリストのご降誕を祝うクリスマスとして祝っています。しかし、全キリスト教会がそうしてきた訳ではありません。それは、復活日(イースター)が過越祭との関連で、時季を特定できるのと違い、主イエス・キリストのご降誕は、前回と今回の聖書箇所はどこからも時季を特定することが出来ないからです。すなわち、12月25日にクリスマスを祝うことは、聖書的根拠に基づくものでなく、古代キリスト教会から始まった風習によるのです。そのために、聖書的根拠がないとして、クリスマスを祝わなかった一部のキリスト教グループもありました。そして、冬の時季、ユダヤ地方は朝晩とても冷え込むため、野宿することは厳しいそうです。そこで、この8節の記述を根拠とするなら、主イエス・キリストのご降誕は、冬ではなく、比較的暖かい時季であったのではないかと想像できます。

バプテスト教会は、聖書主義を掲(かか)げています。そして、教会で行われることは、聖書的根拠を確認することが、大切なこととされます。しかし、ローマ・カトリック教会や東方教会だけでなく、福音主義教会(プロテスタント教会)でも、今述べましたように、クリスマス一つをとっても、聖書的根拠ではなく、古代からの習慣、風習に基づくものもあるのです。

9節 すると、主の天使が近づき、主の栄光が周(まわり)りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。

既に「天使」は、ルカによる福音書に登場していますが、ここで、新共同訳聖書の付録の用語解説にある説明を確認しておきましょう。こうあります。神から派遣される使者。天上で神に仕え、人間の目に見えないが、特定の人間に現れて、神の意志を伝え、あるいは人間を守護し、導きます(マタイによる福音書 第1章20節など)。「ガブリエル」「ミカエル」など名前を持つ天使もありました。新約では悪魔も堕落した天使と信じられています(ペトロの手紙 二 第2章4節、ヨハネの黙示録 第12章7～12節、)。旧約で「主の使い」と言われるとき、多くの場合、神と同一視されています(出エジプト記 第3章2節など)。ですから、新約の天使と旧約の「主の使い」は同じではないのです。

「主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた」。この時、どんなにか眩(まぶ)しかったことでしょうか。しかも、万物の造り主なる主、全世界の支配者である主の栄光が照らしたのですから、それは、厳粛な、人を寄せつけないような聖なる光であったことでしょうか。たぶん、羊飼いたちは、一目でそれが「主の栄光」だと分かったのでしょうか。そし

て、昔から、神を見た者は死ぬと思われていましたので、羊飼いたちは、「非常に恐れた」のです。私どもは、このように神の前に恐れ(畏れ)立ちすくむことがあるでしょうか。クリスマスは、そして、毎週の礼拝を捧げる際に、私どもがまず覚えるべきことは、羊飼いのように、神の栄光の前に「非常に恐れる」ことではないでしょうか。そこが分かっていると、本当の意味の天使が告げる「大きな喜び」は分からないでしょう。

10節 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。

「民全体に与えられる大きな喜びを告げる」。一部の人々が喜ぶ喜びではないのです。そして、一時の喜びでもないのです。いつまでも変わることにない、皆の喜びなのです。

「大きな喜び」。ルカによる福音書 第15章7節に、こういう言葉があります。「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」。見失った羊の譬え、九十九匹を置いて一匹を探しに行く譬えの結びの言葉です。ここでも、大きな喜びが告げられています。そして、ルカによる福音書 第15章はそれに続く「見失った銀貨の譬え」「放蕩息子の譬え」と合わせて、失われたものが見出だされた時、天では大きな喜びがあることを告げているのです。天使たちが告げた「大きな喜び」もまさに、神から失われた私どもが主イエスによって見出され、悔い改めに導かれ、救われる喜びなのです。このように聖書の告げる神は、大きな喜びを与えてくださる神であり、私どもが見出されることを、救われることを、誰よりも喜んでくださる神なのです。

11節 今日(きょう)ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

ここで、「ベツレヘムで」とは言わず、「ダビデの町で」と言われていることは、メシアと呼ばれる救い主が、ダビデ王家から生まれること、ダビデ王家の町、「ダビデの町」で生まれるという預言が成就したことを示しています。

「メシア」とは、そもそも「油(香油)注がれた者」という意味です。旧約聖書では39回用いられています。イスラエルでは、「王」(サムエル記 下 第2章4節)、「祭司」(出エジプト記 第29章7節)が就任の時、油(香油)を注がれました。後に「油注がれた者」は、正しい治世をもって国を治める理想的王を示すようになり(イザヤ書 第11章1～10節)、さらに神の決定的な救いをもたらす「救い主」を指すようになりました。新約時代の人々は政治的解放をもたらすメシアを待望していましたが、主イエスはそれを拒否され、十字架の死によって人々を罪から救うメシアであることを主張されました。新約聖書は、主イエスがこの意味のメシアであることを主張し、主イエスに「キリスト」(メシアのギリシア語訳)という名称を付けました(マタイによる福音書 第1章1節、第16章16節)。

「あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」。今日、ダビデの町でお生まれになった方、この方こそ、あなたがたの民が待ち望んでいたメシアなのだと言は宣言するのです。

12節 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるのである

う。これがあなたがたへのしるしである。」

ここで「布」と訳されている部分を「おむつ」と訳している外国語の翻訳もあるそうです。おむつをむき出しにしたままの姿を民に見せる王子が他(ほか)にいるのでしょうか。また、素敵な産着(うぶぎ)でなく、布にくるまっただけの王子が他にいるのでしょうか。9節で言われていましたように、「主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らした」のですが、ベツレヘムで羊飼いたちが見ることになるのは、光輝く冠を戴(いただ)いた王ではありませんでした。無力で貧しい姿をさらけ出した赤子(あかご)でした。まさに、この世で私どもが生きる現実の中に、それも最も厳しい状況の中に、神の御子は飛び込んで来てくださったのです。神は私ども一人一人のそばに立つために、このように貧しく低くなってくださった御子をお送りくださったのです。

「これがあなたがたへのしるしである」。9節で「主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた」と言われているほどの神の栄光のかけらもなく、立派な王宮で衛兵に守られているわけでもなく、その気になれば簡単に絞め殺してしまえるほどの弱い乳飲み子、しかも、「布にくるまって飼葉桶の中に寝かせられている」、みすぼらしい姿でいらっしゃるというのです。それが、「あなたがたへのしるし」であると言うのです。「大きな喜び」をもたらしてくださるメシアのしるしだと言うのです。神が与えてくださったしるしとはそのようなものだったのです。そこから、私どもがどれほど目に見えるものに惑わされ、踊らされていることかと思えます。どんな時も、真理を見極めることのできる目をいただきたいと思えます。

13節 すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

14節 「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心(みこころ)に適(かな)う人にあれ。」

この天使の歌は、「神に栄光、地に平和」という一つの出来事が歌われているのだと言われます。教会改革者ルターは、この天使の歌がよく分かった者は、もうすべてのことが分かったのだ、と言ったそうです。

ところで、前半の「いと高きところには栄光、神にあれ」は、神への溢れるほどの賛美です。救い主の誕生を喜んで、こう賛美した天使たちの思いも分かるような気がします。では、「地には平和、御心に適う人にあれ」はどう理解したらよいのでしょうか。み心に適っていない人たちには平和が来ないということなのでしょう。文字通り聞くと、そうなりかねません。神のみ心があり、それに従う生活をしている人間だけに平和があるように天使が歌っていると読めそうです。しかし、そうではないと言われます。神が好意をもって、善意をもって、人々に平和をもたらしてくださるよという意味だと言われます。むしろ、私どもがみ心にかなっていない者だからこそ、神がみ心にかなう者としてくださり、平和を与えてくださいますよという祈りを込めた歌なのだとされます。

では、神の善意とはどのようなものなのでしょう。ローマの信徒への手紙 第5章10節で言われています。「(わたしたちが、) 敵であったときでさえ、御子の死によって神と

和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです」。私どもが神の敵であった時、既に、神は御子を生まれさせ、十字架で死なせて、私どもとの間に和解の道を開いてくださったのです。神の善意とはそういうものなのです。

おそらく、13節、14節の出来事は、一瞬のことだったでしょう。そして、そのあと何もなかったかのような静寂が戻ってきたことでしょう。

15節 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。

羊飼いたちは、今見たことはつまらない幻に過ぎないとして、そのままで済ませることもできたかもしれません。起こったことは、一人の赤ん坊が生まれたということです。どこにでもある、ありふれた事とも言えるのです。しかし、羊飼いたちはそうしませんでした。「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と言って、出かけるのです。わたくしどもも、羊飼いたちのような声を、自分自身にかけて、立ち上がり、行ってみることが求められています。それが神への応答です。神に応答した時、初めて私どもは主イエスとお会いできるのです。そこに信仰が生まれるのです。幻に過ぎないと片付けてしまえば、主イエスとお会いできず、「大きな喜び」をいただくことも、信仰をいただくこともできないのです。

ここで「出来事」と訳されている言葉は、原文ではもっと丁寧な言い方で、「実際に起こった言葉」とも訳せるそうです。言葉が本当になったその出来事を見て来ようと話し合ったのです。

16節 そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。

ベツレヘムの町がどれほどの大きさであったかは分かりませんが、羊飼いたちは一所懸命探したことでしょう。そして、探し当てた時、どれほど喜んだことでしょう。その時の様子、羊飼いたちの喜ぶ顔を想像してみるのも楽しいものです。

17節 その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。

羊飼いたちは嬉しくて話さずにはいられなかったのでしょう。微笑(ほほえ)ましい光景が目には浮かびます。この嬉しくて話さずにはいられない姿、黙ってはいらえない姿こそ、真(まこと)の福音伝道者の姿だと思います。

この「羊飼いたちは・・・人々に知らせた」ことと、続く18節の「聞いた者は皆、羊飼いたちの話不思議に思った」ことが、時系列順に述べられているとすると、羊飼いたちは、夜、人々に知らせたから、20節で言われるように「帰って行った」ことになります。そう理解することは不可能ではありませんが、「羊飼いたちは・・・人々に知らせた」ことと、続く18節の「聞いた者は皆、羊飼いたちの話不思議に思った」との記述の前後関係は、必ずしも時系列順に述べられているのではなく、主イエスを礼拝に行った翌日以降も

そのようにしたと理解する方が自然だと思われます。

18節 聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。

何が「不思議」だったのでしょうか。天使が現れたこと、天使のお告げがその通り起こっていたこと、それもその出来事がその時ベツレヘムにいた他の人たちは全く知らなかったことであったことなど、何から何まで、私ども人間の知恵では説明がつかないことばかりだったのです。

19節 しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。

ここに黙想の典型があると言われます。神の前に沈黙し、神の言葉について思い巡らすのです。教会はこのことを大切にしてきました。

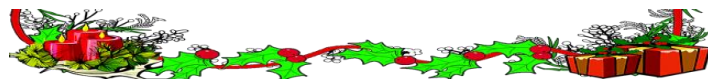
20節 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

羊飼いたちがどのように賛美したかは分かりませんが、羊飼いたちの感謝と喜びに満たされた姿が目浮かぶようです。これも聖書にある美しい場面の一つと言えるでしょう。

21節 八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子(おさなご)はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

「割礼」とは、男子の性器の包皮を切り取ることです。古代オリエント諸民族の風習です。イスラエル民族は、神がその子孫を神の民とする約束のしるしとして、割礼を命じたと信じました(創世記 第17章9～14節)。新約時代には、ユダヤ人の男子は生後8日目に割礼を受けました(フィリピの信徒への手紙 第3章5節)。割礼は、ユダヤ教共同体の一員である印という重要な宗教的意味を持っていました。しかし、パウロは新しい意味での神の民イスラエルであるキリスト教会にとっては、割礼は必要な条件ではないと主張しました(ローマの信徒への手紙 第3章28節～第4章12節、ガラテヤの信徒への手紙 第5章2～6節 参照)。

「幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である」。受胎告知の場面、第1章30節、31節で、「すると、天使は言った。『マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。』」とありました。マリアとヨセフは天使の言葉に従って、幼子に名付けました。「イエス」とは、ヘブル語の表記では、「ヨシヤ」です。「ヤハウエは救いである」という意味です。マリアという名前同様、当時は珍しくない名前でした。





目 次

「ルカによる福音書第2章1～21節(降誕記事)と解説」 並木 裕忠(牧師) p.1

「涸れた谷に鹿が水を求めるように」(詩篇42:2) 並木 和美 p.11

「クリスマスの思い出」 岡野 恭子 p.12

「父が一粒の麦となって」 西山 律子 p.13

「今秋、母が介護状態に」 白井 豊子 p.14

「水曜集会のこと」 羽入田 毅 p.15

「世界大戦中は爆撃機で、戦後は神のみ言葉で、

日本を襲撃した 米国兵士が 宣教師に転身」 犬塚 志朗 p.15





「涸れた谷に鹿が水を求めるように」(詩篇 42 : 2)

並木 和美

「ほんわかチャペルコンサート」出演を誘った友人から、パレストリーナ(1525～1594)の「sicut cervus(鹿のように)」と一緒に歌いたいと連絡がありました。この曲は室内合唱団という大学のサークルで、確か1年のコンサートで歌った曲です。とても懐かしく You tube でこの曲を聴いてみると、カトリックの聖堂に響く当時の歌声が思い出され、一瞬にして心が18歳に！！

また、今年から入れていただいた同盟の「トーンチャイムクワイヤー」で、最初に(というか唯一)演奏した曲もマーティン・ニストロームという方が作った「As The Deer (鹿のように)」(1984年作曲)でした。私にとって、このワーシップソングとの出会いもかなり古く、これまで教会でも繰り返し賛美してきた曲です。

どちらも詩篇42篇から作られています。

涸れた谷に鹿が水を求めるように 神よ、わたしの魂はあなたを求める

神に、命の神に、私の魂は渴く

いつ御前に出て 神の御顔を仰ぐことができるのか

昼も夜も、私の糧は涙ばかり

人は絶え間なく言う

「お前の神はどこにいる」と

・

・

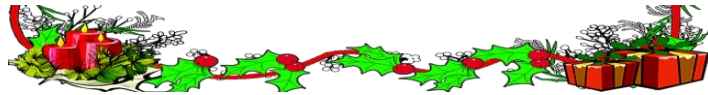
神を待ち望め。

わたしはなお、告白しよう

「御顔こそ、私の救い」と。

私の神よ

心が固くなり、聖書を読んだだけでは素通りしてしまっていた御言葉が、500年前のパレストリーナや40年前のワーシップソングに込められた思いを乗せて、今私の心に響いています。



「クリスマスの思い出」

岡野 恭子

私が小学校低学年だった頃の話になります。

同じクラスに園美ちゃんという、とても美しい容姿と歌声を持った女の子がいました。家が近所なので登下校はいつも一緒、日曜日は彼女に誘われて近くのキリスト教会に行っていました。

そこは大きな資材置場の片隅にある物置小屋で、いつも薄暗く湿った感じのみすぼらしい教会でした。でも牧師夫妻は温かく優しい雰囲気の方だったので、子だくさんにも拘わらず私達をご自宅に招いて下さり、手作りのおやつを出してくださいました。

そうしているうちにクリスマスの季節が近づいて来ますと、私はイエス様の降誕劇の配役が気になるのです。マリア様か羊飼いや、百歩譲って天使？と高を括っていると私に回ってきたのは星（台詞無し、動き無し）でした。

ヒロイン体質の私は毎晩バスタオルを頭から被り、イメージ作りをしていた訳ですから納得が出来ず軽く挫折しました。でも、よくよく考えたら私にはマリア様役は無理というのが分かるのです。今もそうですが、私はまず落ち着きが無い、余計なことを不用意に喋る。たった一晩の大切な劇を台無しにしてしまうのは明白でした。いったい誰がマリア様役だったかは覚えていませんが、この思い出を40年後に私が受洗した教会で笑い話とし

て懐かしんでくれた彼女は今、保育園の園長になり相模原キリスト教会の代表をしています。

そのうち金沢文庫キリスト教会にも来ていただこうと思っていますので皆様、期待してください。

とにかくクリスマスの思い出は印象に残ることが多いようです。

今年はこちらの教会でのクリスマスが私の再出発記念日になりそうですので、大いに楽しみたいと思っています。



「父が一粒の麦となって」

西山 律子

♪主エスは我がため十字架にかけられ
我が罪あがない 墓より蘇られたり♪
♪主は今生きておられる我が内におられる
全ては主のみ手にあり
明日も生きよう 主がおられる♪

夫の父親が47年前 一粒の麦となり亡くなりました。父の死後、夫と私、妹夫婦とその息子夫婦、二人の子供、弟夫婦とそして母、つぎつぎと信仰をいただきました。

父が亡くなる直前「これからは伝道一本です」と病床で牧師夫妻に伝えました。

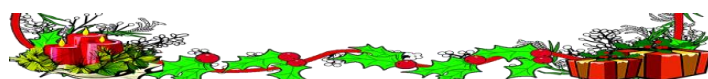
父は生前私たちにキリスト教のことは、ほとんど言いませんでした。しかし私たちのため昼夜お祈りをしていただいていたのだと思います。

脳出血で8年前に倒れて夫と3年前脳硬塞で倒れた私をも、主は恵みと祝福で日々を支えて下さいました。夫とふたりで日曜礼拝に行けるまでに癒されました。

その日の礼拝でしか聞くことができない 神のみ言葉をいただきます。

主が共にいて下さり、全てを最善に導いて下さるので、日々賛美しながら、日々平安に生きる事が許されています。

主に感謝いたします。 ハレルヤ!!





「今秋、母が介護状態に」

白井 豊子

今年は、十月になっても、夏日が続いた。異常気象の秋。いつも彼岸の時期になると、すくくと地から出て、真っ赤な花を咲かせる彼岸花。横浜でも安曇野でもその時期に咲いていた。ところが、今年は十日余り遅れた。

気候の異常同様、十月半ばから母が寝込むという、異常事態が生じた。

十月十六日、夜八時。母がトイレから戻り、布団に入ろうとする時、よろけて転んだ。ダンボールの簡易トイレを準備。夜十二時半、母は簡易トイレから、今度は立ち上がれなくなった。「立たせて」と、呻くように叫ぶ。何とか立たせたものの、なかなか布団に辿り着けない。その一時間後、母をトイレに座らせようとしたが、そっくり返るように倒れ、トイレもつぶれた。幸い、母にけがはなかった。もう二時半をまわっていた。倒れかけた母を布団まで連れていくのが一苦勞。私も汗だく。母の額に手を当てると、かなり熱い。38.9度の高熱。四時に緊急対応の看護師に電話。

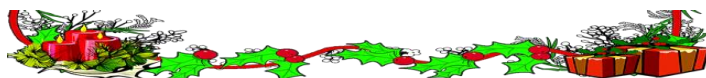
午前十時半、訪問医が来て、レントゲンと血液検査をし、抗菌剤と水分補給の点滴をしてくれた。その後、熱は五日間続き、便秘で苦しみ、連日訪問医が点滴に来てくれた。「検査結果から見ると、何か胃腸に病が隠れているかもしれない。大病院で、精密検査をしないと分からない。でも、その結果、手術とかとなると、体力的に無理。よく考えられた方がよいですよ」と、訪問医は語った。

母は三月と五月に倒れたが、その都度すぐ回復。今回のような事態がくるとは思えなかった。私は一人、自分が取り残されることへの不安や恐怖で、今の現実を受け止めきれなかった。病の原因を探り、元気になってほしいと最初は願った。しかし、当の本人である母は言う。「もう、十分生きた。入院して体をいじくりまわされるのは嫌だ。このままでいい」と。体力のない母が検査を受けたりするのは、逆に死期を早める。日々、胃や腸の不調の訴えがある。苦しむ母に対して、何もできないのが辛い。しかし、一日の中で波があり、穏やかに軽く食べたり、話したりする時もある。その時間を大切にしたい。

今秋、母が倒れて特別な時となって、思った。母は、私が仕事をこなせるようにと、私の結婚以来、ずっと子供達を育ててくれた。その後、子供達が巣立っても、私が好きなことができるようにと、家事のほとんどをしてくれていた。私は、それに甘え続け、母の体力ぎりぎりまで、やり続けていたことを見ようともせず、気づかずにいた。子孝行の母であった。

今、急に介護状態になった母は、初めて人の世話にならざるを得ない状況に追い込まれた。何でも自分の事は、自分でこなし続けた母であったから。

彼岸花が遅れて咲いたような、母の回復は難しい。育てて貰った子供たちと連絡をとり合いながら、覚悟して恩返しをしていきたい。

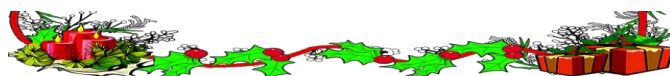


「水曜集会のこと」 羽入田 毅

すでに 10 回実施されましたが、9月11日に始まった現在の水曜集会をご紹介します。

名称は「聖書を読み祈る会」で並木牧師が準備された資料（聖書の逐条と解説）によって「音読し・解説を聞き・熟読黙想して・感想発表と祈り」を行います。正しい解釈に導かれ、独断や誤解が正されて、また自由な雰囲気を楽しむ会です。そして手作りの美味しい昼食（有料）をいただけます。

今はルカによる福音書を読んでいますますが途中からでも参加できます。





「世界大戦中は爆撃機で、戦後は神のみ言葉で、日本を襲撃した 米国兵士が 宣教師に転身」

犬塚志朗

フルブライト奨学金を利用して米国に留学していた名古屋市出身の友人が帰国して、横浜市在住の我が家を訪れ、米国で出版されているある英文の本を私に見せました。その最後のページに掲載されていた写真を見てびっくり！東京に本部を置く Campus Crusade for Christ 指導の下、愛知県の私たちの大学の聖歌隊、その中央に大きく紅顔(厚顔?)の美(醜?)少年、が賛美していました。それが大学時代の私なのです。早速その本を米国にとり取り寄せたところ、半年近く経って私のもとに届きました。そして読んでみてとても感動しました。その内容をここに紹介します。

本の内容は「戦前は爆弾で日本を襲撃、戦後は神のみ言葉で日本を襲撃」その表紙の帯に An Annual Millions Seller (毎年百万冊以上売れる本)と記されていました。当時私の登場する写真を毎年百万人の人々が全世界で見たこととなります。すべて英文で書かれている本なのですが、宝物のようにその本を大事に、大事に保管していたのですが、自宅のどこかで眠っていて、見つかりません。とても、とても残念です。インターネットで調べたり、自分の記憶を辿って内容だけここに紹介します。

主人公 Jacob DeShazer, 1912 年 11 月 15 日 - 2008 年 3 月 15 日 はアメリカ合衆国オレゴン州出身の元アメリカ陸軍航空軍の軍曹。ドーリトル空襲に参加したパイロットとして日本襲撃。後に宣教師として来日。

Jacob DeShazer (ジェイコブ・ディシェイザー) は、世界第二次大戦中、日本人の真珠湾攻撃によって 2400 人以上の米国人が殺戮されたことに対して復讐することを誓いました。そこで米国最高機密・伝説的急襲爆撃手として志願して、日本の上空へ、B-25 戦闘機で飛び立ちました。

ある日、日本の上空を低空飛行していたとき、畑で働いていた老婦が親しみを込めて手を振っていました。味方の突撃機と見間違えたのでしょうか。友好的な表情が見えるほどの低空だったとのこと。

やがてあたり一面に濃霧が立ちこめ、長い間暗闇の中をさ迷ったあげく、中国の日本人占領地区にパラシュートで着地してしまいました。そして日本人兵士に捕らえられ、捕虜となってしまいました。やがて日本本土に送還され、約 40 ヶ月の捕虜生活で、空腹、病気、捕らえられ、残忍な取り扱いを受けました。厳しい環境下で、仲間の捕虜が次々と亡くな

っていきました。

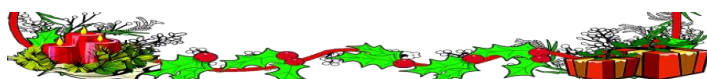
「どうしてこれほど憎しみ合うのだろうか」と、考えていた時、信じられない事ながら、日本人の番兵より英語の聖書を渡されました。独房ごとに一日ずつの廻し読みでしたが、自分の番になった時、神の許しと贖いのメッセージを貪るように読みました。「このやつれ衰えた自分の体を守ってください」と祈り、そして敵兵である日本人を許し、日本人のためにも祈るようになりました。やがて雨が降り、独房の天窓から雨が降り注ぎ込みました。その雨水で神様から直接洗礼を受けたのです。そこで野蛮に見える日本人のために宣教しようと決意しました。

やがて終戦を迎え、帰米して、神学大学(Seattle Pacific College?)に通いました。そして宣教師の資格を取得して再来日したのです。今度は爆弾の爆撃手としてではなく、神のみ言葉での爆撃手として。

ジェイコブ・ディシェイザーについてはインターネットで数箇所で見えています。その宣教師の自叙伝が母校の神学大学から出版され、米国で販売されました。その宣教師が関った名古屋のフリーメソジスト(?)教会の献堂式の日、私たちの大学二十人ほどのグループが聖歌隊員として参加し、私が中央で賛美していたのです。その写真が本の最後のページに掲載されていました。

私が所属していたのは当時愛知県岡崎市に所在した学芸大学で、卒業者の多くが県内の公立小中高の学校の教員です。東京に本部を置く Campus Crusade for Christ から指導牧師がはるばる愛知県岡崎市にやってきて、大学校内で私たちに教え導いたのです。

普段は私と同学年音楽科専攻の友人が聖歌隊の指導・指揮をしていたのです。この本を大事に、大事に自宅に保管していたのですが、今、どうしても見つかりません。とても残念です。





チャペル コンサート

編集後記（広報委員会：犬塚）

今年度は主題聖句「揺るぐことなく 信仰にとどまる」 を掲げて出発しました。並木協力牧師を迎え、森島牧人牧師と森島恵牧師は名誉牧師としてお助けくださいました。新しく若き教会学校児童、保護者も与えられました。が、教会員の高齢化に伴い、元気澆刺に他の教会員を導き励まし、活躍していたと思われる方が、現在静養中。かく言う私も認知症の気配を感じながら、あかしびとを編集させていただきました。誤字脱字、ご不満があると思いますが、どうぞお許してください。神様のご加護を祈るとともに、皆様に豊かな神様の祝福がありますようお祈りしています。

教会ホームページ：

kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp





祝主イエスのご降誕!!

聞けよや 響く
たたえの 唄の
潮(うしお)のごとく
広がりゆくを